〔島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要　Vol. 49　11～16（2011）〕

岩崎京子「かさこじぞう」のたくらみ

岩　田　英　作
（総合文化学科）

The Plot of “Kasako Jizo” written by Kyoko Iwasaki

Eisaku IWATA

キーワード：因果応報、貧しさ、心の豊かさ
causality　honest poverty　richness of heart

１．はじめに

「かさじぞう」のおはなしは、正月を迎える時節と共に、古くから語り継がれてきた昔話のひとつである。戦後、小学校の国語教科書に採用されるようになり、昭和31年、小学２年の国語教科書（大阪書籍）に採用されたのが最初である。それ以降、「かさじぞう」もしくは「かさこじぞう」のおはなしは、小学2年の国語科教材の中で、最も採用率の高い定番教材としての位置を占めるに至っている。

そこで、ひとつ興味深い事柄がある。「かさじぞう」もしくは「かさこじぞう」は、様々な人によって再話されているにも関わらず、小学２年の国語教科書に限って見れば、昭和51年以降、いずれの出版社も、岩崎京子再話の「かさこじぞう」を採用しているのである。岩崎京子の「かさこじぞう」と他の人による「かさ（こ）じぞう」に、何か違いがあるのか。あるとしたら、その違いとは何か。

本論では、2010年現在入手可能な「かさ（こ）じぞう」のうち、次の①～⑨の絵本・紙芝居の比較検討を試み、岩崎京子「かさこじぞう」の独自性に迫りたい。

①かさこじぞう（絵本、1967、ポプラ社）
　文：岩崎京子　絵：新井五郎
②かさじぞう（絵本、1961、福音館）
　文：瀬田貞二　絵：赤羽末吉
③かさじぞう（紙芝居、1973、童心社）
　文：松谷みよ子　絵：まつやまふみお
④かさじぞう（絵本、1993、ひかりのくに）
　文：中島和子　絵：倉石琢也
⑤かさこじぞう（絵本、1998、ポプラ社）
　文：平田昭吾　絵：成田マキホ
⑥かさじぞう（紙芝居、1998、童心社）
　文：川崎大治　絵：二俣英五郎
⑦かさじぞう（紙芝居、2000、教育画劇）
　文：長崎源之助　絵：箕田源二郎
⑧かさじぞう（絵本、2009、あかね書房）
　文：山下明生　絵：西村敏雄
⑨かさじぞう（絵本、2009、岩崎書店）
　文：広松由希子　絵：松成真理子

松谷みよ子には、③のほかに、「かさじぞう」（絵本、2006、童心社、絵：黒井建）があるが、③を元にした内容となっているので、今回の比較からは除外する。

場面ごとの比較一覧

	①岩崎本	②瀬田本	③松谷本	④中島本	⑤平田本	⑥川崎本	⑦長崎本	⑧山下本	⑨広松本
1）家	大晦日 笠売りに	大晦日 笠売りに	大晦日 布売りに	大晦日 笠売りに	大晦日 ねずみの餅つき 笠売りに	大晦日 笠売りに	大晦日 薪売りに	大晦日 笠売りに	大晦日 笠売りに
2）道（往路）	なし	なし	なし	なし	地蔵の雪払い	なし	なし	地蔵に手を合わす	なし
3）町	笠売れず	笠売れず	布売れず 笠売りの笠と交換	笠売れず	笠売れず	笠売れず	薪売れず 笠売りの笠と交換	笠売れず 笠１つと手ぬぐい１枚を交換	笠売れず
4）道（復路）	六地蔵 手ぬぐい	六地蔵 自分の笠	六地蔵 手ぬぐい	六地蔵 手ぬぐい	六地蔵 手ぬぐい	七地蔵 自分の笠	六地蔵 手ぬぐい	六地蔵 手ぬぐい	六地蔵 手ぬぐい
5）じいさまの帰宅	２人の会話 餅つきの真似 食事 就寝	２人の会話 食事 就寝	２人の会話 歌 食事 就寝	２人の会話 食事 就寝	２人の会話 就寝	２人の会話 食事	２人の会話 食事 就寝	２人の会話 就寝	２人の会話 餅つきの真似 食事 就寝
6）地蔵さまの訪問	「じょいやさ」 地蔵の歌 良い正月を迎えた	「よういさ」 地蔵の歌 幸せになった	「じょいやさ」 地蔵の歌 「まめでなあ」	「よおいやさ」 地蔵の歌 幸せになった	「えいさよいさ」 良い年を迎えた	「エッサラホイ」 お月さまが村を照らす	「じょやさ」 幸せになった	「どすどす」 地蔵の歌 めでたい	「ずんずんずん」 良い正月を迎えた

※本の名称は、文の作者の氏名をとって、便宜上筆者の方で付けたものである。

２．場面の比較

上記９本の「かさ（こ）じぞう」を見渡して、このはなしは、おおよそ次の６つの場面に分けることができる。

まず、１）大晦日に家で過ごすじいさまとばあさまが描かれ、次に２）町へ向かう道中、３）町での売り、４）帰りの道、５）じいさまの帰宅、６）地蔵さまの訪問となる。上の表は、９つの本を場面ごとに比較した結果を簡単な一覧にまとめたものである。それでは次に場面ごとに見ていくことにする。

１）家について

ここでは、正月を迎える大晦日の貧しい二人暮らしの老夫婦が描かれる。正月の用意をするために笠を売りに行くのが一般的であるが、③布売り、⑦薪売りの場合もある。

この場面で特異なシーンが描かれているのが⑤である。家に住みつくねずみたちが餅つきを始め、それを見た老夫婦は、やっぱり私たちも餅の用意をしようと町行きを思いつくのである。ねずみの餅つきのための米は、実は老夫婦が家に残っていたわずかばかりの米をねずみに供したものであり、語り手は、「ほんとうに、こころのやさしいおじいさんとおばあさんだったのです」と語る。老夫婦の心の優しさは、いずれの本においても後に強調されるところであるが、この⑤のみは最初の場面からその点に読者の視線を向けさせるように企図されている。

２）道（往路）について

往きの道が描かれるのは⑤と⑧の２本だけである。

⑤では、お地蔵さまに降り積もった雪を「ひとつひとつ、ていねいにはらいのけてあげ」るじいさまが描かれる。さきほど１）で見た優しさの強調が、ここでも繰り返されることになる。さらに、ここでじいさまは、お地蔵さまに、「ことしも一ねん、ありがとうございました。またよいとしがむかえられ

ますように、おねがいしますよ」と手を合わせている。このおはなしの結末につながる伏線が、ここですでに張られているのである。

⑧では、六地蔵に「どうか、かさがうれますように」と、手を合わせるじいさまが描かれる。⑤ほどの豊かな意味を持つ設定ではないものの、じいさまの日々の暮らしの中で六地蔵への信仰が定着していることをうかがわせる一場面となっている。

3）町について

じいさまが町に持っていった物が売れないという点では、すべてに共通している。ただし、③と⑦の場合、じいさまは笠を布や薪と交換することによって手に入れる。その点、後に地蔵さまにかぶせるための笠を最初から持っている場合に比べて、複雑な構成となっている。

はなしの聞き手・読者の立場に立てば、まず、「かさ（こ）じぞう」というタイトルが知らされ、ついで、じいさまが町に笠を売りに行く時点で、タイトルとじいさまが手にする笠が結びつく。しかし、じいさまが布や薪を売りに行くパターンでは、まだその時点で、タイトルと物語の内容は結びつかない。聞き手・読者がタイトルから期待する展開は、その場合遅延されることになる。そして、布や薪との交換によってじいさまが笠を手に入れたとき、聞き手・読者の前には、タイトルから想像される期待の地平がひとつ広がることになる。もちろんこの遅延の手法は、ただ物語をいたずらに長引かせるものではない。読者の期待を引っ張っておいて、意外な形でそれがかなえられるというインパクトをもたらすためのものである。

さらに異色なのが⑧である。じいさまは笠を六つ持って町に売りに出かけた。そして六地蔵に出会うのだから、そのままなら笠は足りたのである。ところが、じいさまは、町で笠の一つを手ぬぐい一枚と交換したのである。なぜなら、出かける前に、ばあさまの一言、「かさがうれたら、わしにも、あたらしい手ぬぐいをたのみます」があったからだ。それによって笠が一つ不足する結果となり、最後の地蔵様には、ばあさまのために買った手ぬぐいをかぶせてあげることとなる。

このような複雑な仕掛けの中で、じいさまのばあさまに対する愛情を描いている点、さらにはそれに勝るとも劣らぬものとして地蔵様への優しさを描いている点が、⑧の大きな特徴となっている。

4）道（復路）について

道野辺で雪をかぶっている地蔵さまは六地蔵が一般的である。⑥のみ地蔵さまが七体となっているが、七地蔵も実際にないわけではない。かさじぞうの昔話を広く見渡すと、そのほかにも、三体や十二体などの場合もある。

さて、いずれのはなしにおいても、地蔵さまにかぶせてあげる笠の数は、売りに行った、もしくは交換した笠の数では、きまって一つ足りない。そこで、じいさまは、自分のかぶっていた笠、もしくは手ぬぐいを、残る一体の地蔵さまにかぶせてあげることになる。「かさ（こ）じぞう」の中で、じいさまの優しさが極まる瞬間である。

そもそも、地蔵さまにみずからの笠をかぶせる行為は、民衆の中でどのように発想され、ひとつのおはなしとして形成されていったものだろうか。たとえば、尾張四観音の一つである笠覆寺は、笠寺として親しまれ、藤原兼平と玉照姫の伝説が残る。ある娘が寺の前を通りかかると、観音様が雨ざらしになっており、娘は自分の笠を観音様にかぶせてあげた。その娘を見初めて妻にしたのが藤原兼平で、娘は玉照姫となった。延長　8年（930）、二人は大寺を建て、笠をかぶせた観音を安置、これによりそれまでの小松寺から笠覆寺に改められたのだという。この伝説も、みずからの笠を観音様にかぶせることを信仰の篤さのシンボリックな行為として描いたものである。同様の行為をそれ以前から見出すことができるかどうかは定かではないが、いずれにしても、「かさ（こ）じぞう」の原型となる発想は、今より1000年もの昔に垣間見ることができるのである。

ところで、じいさまがかぶせてあげた手ぬぐいや笠について、本によっては形容が付されるものが少なくない。①では「つぎはぎのてぬぐい」、④では「つかいふるし」の手ぬぐい、⑥では「ちいと、い

たんで」いる笠、⑦では「ふるいつぎはぎだらけの手ぬぐい」、⑨では「ふるてぬぐい」とある。

つぎはぎであったり古かったりすることで、そこには老夫婦の貧しさとともに、手ぬぐいや笠がふたりにとっては極めて貴重な品であることがよく表されている。手ぬぐいをいったん地蔵さまにかぶせてあげた後、ふたりが手ぬぐいを手にすることは容易なことではない。手ぬぐいが老夫婦にとって貴重であればあるほど、それを地蔵さまにかぶせてあげる行為の尊さも価値を増すのである。

5）じいさまの帰宅について

この場面では、いずれの本も、帰宅したじいさまが、町で売れ残った、もしくは交換した笠を帰りに地蔵さまにかぶせてあげたいきさつを、ばあさまに語るところから始まる。

それに対するばあさまの反応は、①いやな顔ひとつしないで「それはええことをしなすった」、②「おじぞうさまにあげてよかったな」、③「そりゃええことをしなさった」、④にっこり笑って「そりゃあええことしてきなさった」、⑤「それはいいことをなさいました」、⑥「おじぞうさまも、さぞおよろこびじゃろう」と、おばあさんはえろう喜んでくれた、⑦「そりゃあ、ええくどくしてきたな」、⑧「それはいいことをされました」、⑨「それは、いいことをしましたなあ」と、9本すべてに共通して、じいさまの行いを暖かく受け入れるものとなっている。じいさまの優しさもさることながら、ばあさまもそれに負けず劣らず優しい心の持ち主として描かれ、両人そろっての優しさが、後の地蔵さまからのプレゼントの必須要件となっている。

その後、この場面は、いくつかの例外はあるが、概ね食事から就寝へと展開していく。食事の内容は、①漬物とお湯、②おかずなしのご飯、③漬物とお湯、④漬物、⑥おかゆ、⑦お湯、⑨お湯である。地蔵さまにかぶせた古いつぎはぎだらけの手ぬぐいに引き続き、大晦日の晩にお茶すら口にできない老夫婦を描くことで、ふたりの極度の貧しさが浮き彫りにされる。

この場面で特徴的なのは、①岩崎本と③松谷本、そして⑨広松本である。この3本以外では、じいさまとばあさまの会話に続いて、食事、就寝と続くのだが、①③⑨の3本のふたりは、すぐに寝ないのである。寝ないで何をしているかというと、①⑨では餅つきの真似、③では歌である。この点については、①岩崎本の独自性を考える上で重要であるので、後に詳しく見ることとする。

6）地蔵さまの訪問について

この場面では、大方の場合、地蔵さまが夜中にかけ声をかけながら橇で食物や金品を運んでくる。地蔵さまのかけ声は、表に記したとおり、本によって様ざまである。このかけ声は、聞き手・読者、特に子どもの記憶に深く残るものである。それゆえか、各本とも独自性を競っているかのようである。

その後、①～④、⑧では、地蔵さまが歌う歌が挿入されている。たとえば、①では次のような歌である。

六にんの　じぞうさ
かさこ　とって　かぶせた
じさまの　うちは　どこだ
ばさまの　うちは　どこだ

②～④についても、字句の多少の違いはあるものの、内容は①と同じである。ただし、⑧だけは、「正月はええもんだ／きれいなべべきて/おみやにまいり／正月はええもんだ」と、正月を寿ぐ歌となっている。

①～④のパターンの「かさ（こ）じぞう」を学生の前で読むと、学生の中にはこの箇所に疑問を持つ者もいる。じいさまから笠をかぶせてもらった地蔵さまがじいさまの家を探すのは分かるが、なぜ、ばあさままで歌の中に出てくるのか、と言うのである。これは先にも述べた通り、じいさまが地蔵さまに対して行なった行為を、ばあさまは受け入れ、優しさを共有しているので、地蔵さまからの福も、ふたり一緒に受け取るべきものとして語られているのである。

もうひとつ、この歌に関連して興味深いことがある。②と④では、家はどこだとの地蔵さまの問いかけに、じいさまが思わず「ここだ、ここだ」と叫ん

でいる。③では、じいさまとばあさまは、恐ろしさのあまり耳をおさえてふるえていたとある。残る①の岩崎本では、さきほどの「どこだ」の歌に対し、ふたりはまったく反応していない。それにも関わらず、地蔵さまは、ちゃんとじいさまの家の前で止まり、物資をおろして帰っていくのである。実は、①においても、以前は、「ここだ、ここだ」と叫ぶじいさまが描かれていたのである。ところが、いつの時点でか、叫ぶじいさまは削除され、現行の形になったのである。おそらく作者は、「ここだ、ここだ」と叫ぶじいさまに、見返りを期待しているかのような、あるいやらしさを感じたのではあるまいか。そのため、話の流れがいくらか不自然になるリスクを冒してでも、叫ぶじいさまを消し去ったのではないだろうか。

３．《餅つきの真似》、《歌》がもたらすもの

じいさまが帰宅し、ばあさまもあたたかく迎え入れ、しかし正月の用意はできないまま年越しを迎えることとなった大晦日の夜、①岩崎本⑨広松本では、ふたりは餅つきの真似をし、③松谷本では、ふたりは歌を歌う。その場面を、次に引用する。なお、⑨広松本については、餅つきの場面の内容が、先行する①岩崎本と似通っており、①岩崎本を踏襲したものと見なしうる。したがって、以後、①岩崎本と③松谷本に限って考察を加えることとする。

①岩崎本

「やれ　やれ、とうとう、もちこ　なしの　としこしだ。そんなら　ひとつ、もちつきの　まねごとでも　しようかのう。」

じいさまは、

こめの　もちこ
ひとうす　ばったら

と、いろりの　ふちを　たたきました。

すると、ばあさまも　ほほと　わらって、

あわの　もちこ
ひとうす　ばったら

と、あいどりの　まねを　しました。

③松谷本

あした　あしたは　お正月
お正月は　ええ　もんじゃ
あぶらのような　さけ　のんで
ゆきより　白い　まま　くうて
わり木の　ような　とと　そえて

じいさまと　ばあさまは、なっぱの　つけもの　かじり　かじり、おゆを　のんで、それでも　まるで　子どもの　ように　うたを　うたって、おとしとりを　したと。

「かさ（こ）じぞう」は、じいさまとばあさまの地蔵さまに対する善行によって、地蔵さまからふたりに福が授けられ、ふたりはよい正月を迎えることができたというもので、仏教説話の色彩が強い因果応報譚である。

そうしたテーマに即して見れば、①③に描かれる餅つきの真似や歌のシーンはいささか不思議に思える。なぜなら、ことさら餅つきの真似や歌がなくても、このおはなしのテーマ、すなわち因果応報は十分に成立するからである。単なる蛇足という以外に、餅つきの真似や歌のシーンがもたらすものは、はたしてあるのだろうか。

①岩崎本では、餅のない年越しということで、じいさまが餅つきの真似を始める。現実的に考えれば、腹の足しになるわけでもなく、なにか空しい雰囲気さへ漂いそうだが、じいさまとそれを見ていたばあさまには、そんな空気は微塵もうかがうことができない。それどころか、じいさまが囲炉裏の縁を叩いたのを受けて、ばあさまは「ほほと　わらって」、あいどりの真似をし、みずからも餅つきの真似ごとに参加するのである。「馬鹿なことをしてないで、早く寝なさい」などと言うばあさまは、ここにはいない。町から帰ってきたじいさまを、「ええことをしなさった」と迎え入れる姿そのままに、ばあさまは常にじいさまに寄り添い、支える存在である。

③松谷本では、現実には漬物とお湯だけの食事をとりながら、じいさまとばあさまは、酒・白飯・とと（魚）で満たされた正月祝いの歌を歌う。しかも、その歌いぶりは、「子どもの　ように　うたを　うたって」とある。

①と③は、現実に満たされないものを真似や歌で満たそうとする点で共通している。さらにその際の、真似ごとや歌に興じるふたりの様子は、①③どちらともに、まことに無邪気そのものである。

該当箇所の絵を見てみると、①③ともに、餅つきの真似、歌の場面が大きく見開き一面で描かれている。①では、囲炉裏を囲んで餅つきの真似をするじいさまとばあさまが描かれ、と同時に、杵を打つじいさまとあいどりをするばあさまの空想の図が描きこまれている。ふたりの表情は穏やかで、口元からは笑みがこぼれている。③では、外から障子越しにシルエットになったじいさまとばあさまが描かれている。ふたり向き合って、手拍子をとりながら歌っている様子だ。シルエットながら、いかにも楽しそうな雰囲気が伝わってくる。

これらの場面を眺めていると、ひとつの疑問がわいてくる。地蔵さまから贈り物を届けられる以前、じいさまとばあさまははたして不幸だったのか、という疑問である。

「かさ（こ）じぞう」の冒頭は、たとえば①では、「むかし　むかし　ある　ところに、じいさまと　ばあさまが　ありましたと。／たいそう　びんぼうで、その　日　その　日を　やっと　くらして　おりました。」とある。昔話の常套句に続けてまっさきに知らされる情報は、ふたりが極貧だということである。それ以降、つぎはぎだらけの手ぬぐい、漬物とお湯という具合に、ふたりの貧しさが強調されながら、結末で大どんでん返しが待ち受けているというのが、「かさ（こ）じぞう」の構成だ。

結末でふたりにもたらされる幸福は、食糧や正月飾りや金といったモノの豊かさである。貧しい時のふたりは、モノがないという点でたしかに不幸であったかも知れない。しかし、①岩崎本と③松谷本が、餅つきの真似、歌のシーンを挿入することで描いているのは、モノがあるなしの幸・不幸ではない。

餅つきの真似、歌のシーンには、屈託のない笑いがあり、貧しいながらも仲良く暮らすふたりの知恵がある。３畳一間の小さな下宿で、お金はなくても幸せに暮らす恋人同士のようではないか。モノの豊かさで成就する因果応報譚から心の豊かさを描いた「かさ（こじ）ぞう」へ。①岩崎本と③松谷本は、一見テーマと直接関係のないようなシーンをさりげなく挿入することによって、テーマを揺さぶるような新たな価値を作品に与えることに成功したのである。

４．おわりに

岩崎京子「かさこじぞう」は、松谷みよ子「かさじぞう」とともに、モノでは買えない幸福を描いて、他の「かさ（こ）じぞう」とは一線を画す。その意味で、岩崎本と松谷本は、同じ独自性を持つ。2本のうち岩崎本のみが専ら教科書に採用される理由については、作品世界の比較検討だけで答えを見出すことは困難である。

岩崎京子は、絵本のあとがきで次のように述べている。

わたしは、＜清福＞ということばは、このふたりの姿だと思いました。じいさまとばあさまは、地蔵さまにお正月じたくをいろいろもらいますが、そのたまものにまさるしあわせを、もっていたのだということを、よみとってほしいと思います。

この言葉から、餅つきの真似のシーンは、作者によって十分意識的に挿入されたものであると推察できる。しかも、餅つきの真似の場面に象徴される＜清福＞を、作者はモノでもたらされる幸福以上の幸福として考えているようである。

地蔵さまから届けられた正月支度は、笠や手ぬぐいをかぶせてもらったお礼としての意味合いだけではなかったろう。岩崎本の場合、むしろそれは、貧しいながらに＜清福＞に満たされたふたりへの寿ぎであったのではないだろうか。

（平成22年11月26日受理）